

謹んで鷲見透玄老師のご遷化を悼み 御法愛を深く感謝し奉る

善光寺海外留学僧
派遣育英会理事

東

隆

眞



昭和五十九年一月十五日、横浜市善光寺で、善光寺海外留学僧派遣育英会の設立準備委員会が開かれた。

このとき集合した顔ぶれは、鷲見透玄老師（大本山總持寺祖院監院）、佐藤俊明老師（山形県宝泉寺住職）、奈良康明博士（駒澤大学副学長）、黒田武志老師（善光寺住職）と私（駒沢女子短期大学学監）、それに新美昌道老師（東京都福厳寺住職）が幹事として加わった。

このとき、黒田老師より基金が贈呈され、会を代表して鷲見透玄老師が受領された。鷲見老師は、黒田老師のこのたびの発願に双手をあげて賛同し、深く共鳴するところがあつた。その様子が、鷲見老師のおだやかな片言隻語、鄭重をきわめる一挙手一投足にうかがわれ、強い印象となつて、いまでも残っている。



鷲見老師と黒田方丈（昭和38年）

善光寺海外留学僧派遣育英会理事（第一号選出）鷲見透玄老師には、平成四年八月三十日、病名心不全、世寿八十二歳をもつて、名古屋国立病院で、ご遷化になつた。謹んで哀悼の意を表するものである。

昭和三十三年から同三十八年のころ、大本山總持寺單頭として雲水の教育に専念しておられた鷲見老師のもとに、僧堂（昭和三十七年春より約半年間大本山總持寺本山僧堂安居、昭和三十八年春より二年間同特別僧堂安居）に安居して、親しくご接化をいただくようになったのが黒田老師である。更に、鷲見老師は、昭和三十九年より曹洞宗北米開教総監として渡米、同四十六年に帰国されるまで、海外での禅の宣揚に辛苦された。ちようど、昭和四十二年秋から昭和四十四年春まで、時を同じうして、アメリカに渡つた黒田老師は、白人のみを対象として開



教に挺身していたご実兄の前角博雄老師（ロサンゼルス禅センター仏真寺主管）を訪ね、また總監のロサンゼルス北米別院禅宗寺主管鷺見老師の主宰する火曜参禅会の運営、指導を補佐したのであった。

このように永きにわたる深い道交、親交が土台となって、相互の信頼がより確かなものとなり、年齢の差こそあれ、肝胆あい照らす以心伝心のきずなが生まれたのである。

後年、入院加療中の鷺見老師は、医師に内密で黒田老師に電話を通じ、破格の親密な交歓があったのも一再ではない。そして、鷺見老師は、ひとえに育英会の存在を喜び、発展と充実を祈願された。その念力は、育英会の原動力となって生きていく。

私が鷺見老師にはじめて拝肩をえたのは、昭和二十九年の早春、大本山總持寺僧堂に安居するため、東海道を托鉢行脚して東上の途中、名古屋市の泰増寺に立ち寄ったのがきっかけである。その当時、泰増寺は、戦災のため急造の仮屋であった。境内には瓦礫が山のように積みあげてあった。お寺には、四十歳なかばの老師のほか、老師のご母堂とお弟子の若き日の鷺見弘明師のお三人が住んでおられた。私は、ご母

堂から、あんたは透玄のお弟子になりなざるがいい、と、しきりにすすめられた。老師と弘明さんと私は、作務のあと、銭湯に行ったりして、とうとう三日間ばかり滞在してしまつた。爾来、およそ三十七年のあいだ、老師は、いろいろのかたちで、私を用いていたいたり、お声をかけていただいたり、お教えをいただいたり、文字どおり可愛がつて下さつた。ご遷化の直前にお会い出来たのはなりよりのよろこびと思つている。育英会を通じて、驚見老師と黒田老師とのご縁が出来たのも、ふしぎなつながりというほかない。深く深く感謝申しあげる。

ここで、各種の資料にもとづいて、老師の略年譜をとりあえずまとめしておく（誤りなどがあれば、後日他の機会をえて訂正したい）。

明治四四年一月二〇日 愛知県名古屋市で出生

大正七年 得度

昭和一一年三月 駒沢大学仏教学部禅学科卒業

昭和一二年 曹洞宗大本山総持寺能登別院専門僧堂安居

昭和一四年より同一六年まで 奈良県法隆寺勸学院で佐伯定胤和上に師事して唯識、俱舎学を学ぶ

昭和一八年 愛知県名古屋市中区・泰増寺住職

昭和二二年 愛媛県瑞応寺専門僧堂単頭就任

昭和三三年 曹洞宗大本山総持寺本山僧堂単頭就任。東京都渋谷区長泉寺土曜參禅会の

指導にあたり、昭和三八年以降、黒田老師が時にこれを補佐する

昭和三五年 インド仏蹟巡拝

昭和三九年より昭和四六年まで 北米開教總監部總監、ロサンゼルス北米別院禪宗寺主管となる

昭和五三年六月より平成四年五月まで 曹洞宗大本山總持寺祖院監院

平成四年八月三〇日午後五時八分 ご遷化。この間、泰僧寺をはじめ昌福寺（新潟県）、乾坤院（愛知県）、禪宗寺（アメリカ）の伽藍を新築、再建、復興す

愛知県、石川県をはじめ全国各地の要請に応じて、講演、老人福祉、青少年指導などにあたり、仏教会長などの役職も兼ねる。また愛知学院の教壇に立ち、駒沢大学でも学生の指導にあたる。京都府舞鶴市桂林寺住職三川啓明老師の法を嗣ぐ。号は養拙。能山會會長。曹洞宗師家。曹洞宗権大教正。曹洞宗大本山總持寺西堂。日本仏教学會會員。國際仏教興隆會理事。インド・マハ・ボデイ・ソサエティ終身會員。善光寺海外留學僧派遣育英會理事。遺弟は一二人。隨身は四員。密葬は老師の遺言で行わず、九月二日、ご自坊の愛知県宇宙山乾坤院（老師は乾坤院独住十一世）で本葬が行われた。

昭和五十五年、金花舎は、A5版一千二百余頁の大冊『現代仏教を知る大事典』を刊行した。このなかに、「現代仏教人名録」の項があり、求められるまま、私は、驚見透玄老師のプロフィールについて、次のように書いた。

北米開教総監部総監としてアメリカへわたる(昭和39年7月)



「老師は、眉目秀麗、音吐朗々という語がぴったりの美僧で、法衣姿がよく似合う。詩偈、書、語学、随筆、茶道など、往くとして可ならざるはなく、加うるに近代的知性も豊か。洗練された多才ぶりは、群鶏の一鶴である。こう言ってしまうと、あたかも世智弁聡の長けた世間僧のように聞こえるかも知れないが、とんでもない。

駒沢大学で禅学を修めたのち、法隆寺勸学院で三年間にわたって唯識俱舎を学び、僧堂生活、雲水教育に専念すること多年、北米開教総監の重任を果たし、尾張の名刹・乾坤院を見事に復興したという経歴が物語るとおり、その足跡は一貫して仏教僧侶としての本道を歩んできた。しかも自らを決して語ることはない。世事に通暁して、人情の機微こまやかなこの独身僧は、当今、曹洞宗を代表する顔である。

総持寺を能登から鶴見に移転することを断行した一世の傑僧・石川素童禪師の孫弟子にあたるから、いま大本山総持寺祖院監院の要職にあることは、不思議なめぐりあわせと言えよう。総持寺にとってなくてはならないお人である。能登は仏国で、僧侶に対する期待も大きいだけに批評も厳しいが、

老師の評判はすこぶるよい。学に偏ならず、行にとらわれず、ただ祖風を慕って、黙々と寒素に徹する老師の日常底は、現代仏教の誇りである。自信をもって「この人を見よ」といえる数少ない宗師家のひとりである」。

あれから十数年を経過したが、驚見老師は曹洞宗を代表する顔であり、現代日本仏教の誇りであり、「この人を見よ」といえる数少ない宗師家のひとりであったという私の老師に対する賛仰のきもちは変わらない。大寂定中、今後とも、老師の変わらぬご指導を願うや、切なるものをおぼえる。

（文学博士。駒沢女子短期大学副学長。駒沢学園女子中学高等学校長）